

私と暮らし、新しいこの先へ

交流 Style Magazine

2025
WINTER
/
SPRING

私と暮らしの「この先」が見つかるライフナビゲーションメディア。

暮らしのなかにある民芸

中部電力株式会社

〒461-8680 名古屋市東区東新町1番地

www.chuden.co.jp/

総務・広報・地域共生本部 広報制作グループ

2025年2月発行 130号



この印刷物に使用している用紙は、
森を元気にするための間伐と間伐材の
有効活用に役立ちます。
www.mori-cho.org

中部地域で育まれてきた、愛おしい手しごと

馬の目皿（愛知県瀬戸市）/鳩の砂糖壺（長野県須坂市）/

飛驒さし（岐阜県高山市）/型染め（静岡県浜松市）/

木工・編組品 /郷土玩具

文筆家・甲斐みのりさんとめぐった
中部の手しごとをふり返る

民芸・ものづくりの担い手たち

[つくる人] 安土草多さん（ガラス作家）/上原かなえさん（クラフト作家）

[つかう人] 朝倉圭一さん（やわい屋 店主）

中部地域の
民芸ゆかりのスポット

私と暮らし、新しいこの先へ

交流Style Magazine

中部電力がお届けする、私と暮らしの「この先」を提案するライフナビゲーションメディア「交流Style」。「交流Style Magazine」では、その中から厳選したコンテンツをお届け。今号は、中部地域の「手しごと」「民芸」をテーマにお届けします。



Cover photo

山内染色工房

静岡県浜松市の染色家・山内武志さんの工房にて、制作中の型染め。シンプルでモダン、どこかぬくもりを感じるパターンが多くの人を惹きつけている。

コンテンツ充実!
明日の暮らしのヒントが見つかる



「交流 Style」ホームページ
koryu.chuden.co.jp/

公式インスタグラムでは
更新情報やプレゼント情報を届け!



「交流 Style」
公式インスタグラム
[@koryu_chuden](https://www.instagram.com/koryu_chuden)



「中部和菓子図鑑」
公式インスタグラム
[@chubu_wagashi_zukan](https://www.instagram.com/chubu_wagashi_zukan)

Contents

愛おしい中部の手しごと

p.04 馬の目皿

瀬戸本業窯（愛知県瀬戸市）

p.06 鳩の砂糖壺

すの・くらふと（長野県須坂市）

p.08 毎日使いたい木工・編組品

- ・木杓子／奥井木工舎（岐阜県高山市）
- ・南木曾ろくろ細工の器／カネキン小棕製盆所（長野県・南木曾町）
- ・戸隠竹細工のかご／原山竹細工店（長野県長野市）
- ・曲げ箸／hashime（静岡県袋井市）

p.10 中部の手しごと・民芸～つくる人～

- ・ガラス作家 安土草多さん（岐阜県高山市）
- ・クラフト作家 上原かなえさん（長野県・御代田町）

p.12 飛騨さしこのテーブルウェア

本舗 飛騨さしこ（岐阜県高山市）

p.13 山内染色工房のマルチクロス

山内染色工房（静岡県浜松市）

p.14 思わず笑みがこぼれる郷土玩具

- ・浜松張子／浜松張子工房（静岡県浜松市）
- ・飛騨の雪入道／奥井木工舎（岐阜県高山市）
- ・多度の彈き猿／神社前 宮川屋（三重県桑名市）
- ・さら鉢／松田民芸品（愛知県西尾市）
- ・寅童子／竹内時計店（愛知県新城市）
- ・鳩車／（長野県・野沢温泉村）

p.16 中部の手しごと・民芸～つかう人～

やわい屋 店主 朝倉圭一さん（岐阜県高山市）

p.18 文筆家・甲斐みのりと行く 中部手しごとめぐり

文筆家・甲斐みのりさんと
訪れた中部地域の
手しごと現場・15選!

p.22 中部地域の 民芸ゆかりのスポット

民芸について
もっと知りたいなら、
各地の民芸関連施設へ！

p.23 交流Style Information



手のぬくもりを感じるものが 心豊かな暮らしをつくるきっかけに

「民芸」の思想に通ずるような手しごとが、中部地域には多く息づいています。目まぐるしく変化する社会において、このような品々を知り、暮らしに仲間入りさせることができ、私たちの毎日にあたたかみを加えてくれるはずです。

「交流Style」は、これまででも中部地域で育まれてきた営みに視線を注いきました。そこで今号では、あらためて心惹かれる手しごとの魅力を探っていきます。



豊田市民芸館 館長
都筑正敏さん



「民芸」提唱から100年 今まで求められる手しごとのぬくもり

美術評論家であり思想家でもあった柳宗悦は、大衆の暮らしの中でごく当たり前に使われている手しごとの品に“美”を見つけ、無名のつくり手や地域で紡がれた技、長く愛される普遍性に注目し、「民芸（民衆的工藝）」の考え方を提唱しました。それが1925年、電気の利用も盛んになるなど、近代化に向けて突き進んだ時代。そして100年たち、生活の多様化で私たちは感触を知らないままインターネットでの購入しています。人々が“手ざわり”的あるものを探していることは、どちらの時代も共通しているでしょう。私たちは今、知らず知らずのうちに地域で愛されてきたものを見つめ、人の手から生まれたぬくもりのある品を暮らしの中で欲しているのではないかでしょうか。民芸は、過去のものでも難しいものでもなく、気づけば身近にあり、ともに暮らしている存在なのだと思うのです。



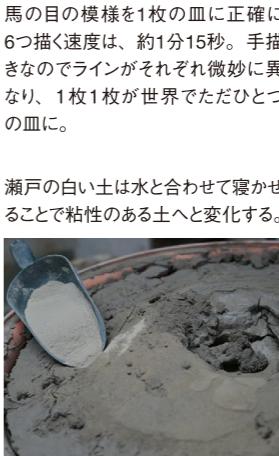
愛おしい 中部の手しごと

丁寧なしごとから生み出される生活道具や日用品。

中部地域には、使うほどに愛着が湧き、

暮らしを豊かにしてくれる品がたくさん生み出されている。

「交流 Style」がセレクトした、中部地域を代表する手しごとの品や民芸品をご紹介。



馬の目皿

瀬戸本業窯／愛知県瀬戸市

時を超えて、今に馴染む 毎日使いたい瀬戸焼

皿の内側の縁に描かれる大胆な渦巻き模様が馬の目のように見えたことが名前の由来。どっしりとして厚みがあり、なんとも言えないやわらかな風合いがある。それは、昔ながらの方法と材料でつくる釉薬や、瀬戸の白い土ゆえの緩やかさがあるからだろう。瀬戸本業窯の八代後継である水野雄介さんは「瀬戸一帯の土は500万年ほどかけてつくられた鉄分の抜けた白い土。この土を持つのはこの中部エリアだけ。瀬戸が鎌倉時代から今に至るまで全国でも有数の焼き物の産地である理由は、この白い土、そして長年蓄積された技術力にあるのだと思います」と力強く語ってくれた。

江戸後期に庶民のための日用の器として、現在の愛知県瀬戸市の洞地区を中心につくられてきた馬の目皿は、一時期生産は途絶えたものの、民藝の考え方とともに今を生きる器として注目を集めている。

水野さんの祖父で六代の水野半次郎は、柳宗悦らによる民藝運動に感銘を受け、陶芸家であり民藝運動にも関わった濱田庄司やバーナード・リーチから指導を受けて、瀬戸本業窯のものづくりに新たな活路を見出した。七代・八代が、その意志を今に伝えている。

材料も製法もデザインも昔のままの馬の目皿。これを現代の感性で眺めてみると、和洋中のジャンルを選ばず、どんな料理にもインテリアにも合う不思議な力を持っている。これこそ「民衆が日々の生活に必要とする品」で、「健康の美こそ美しさの本流である」と柳宗悦が説いた民藝そのものではないだろうか。

瀬戸本業窯・八代
半次郎を後継する
水野雄介さん。

取材協力／瀬戸民藝館・
瀬戸本業窯

瀬戸民藝館
愛知県瀬戸市東洞町17
TEL／0561-21-3773
<https://www.setomingeikan-museum.jp/>

「交流 Style」ホームページでは、瀬戸本業窯
八代後継・水野雄介さんのインタビューを公開中。



カラフル&ぽってり 食卓の彩りに

鳩の砂糖壺

すの・くらふと／長野県須坂市

素朴な造形とカラフルな色使い。その姿に多くの人が魅了される鳩の形の砂糖壺は、信州の工芸品として知られており、鳩の頭部が蓋、尾羽がスプーンの持ち手になっている。春原敏之さんの叔父が約60年前につくり始め、甥である春原さんが約40年前に受け継いだものだ。元々は、信州の農民美術がルーツなのだと。農民美術とは農閑期の農家の副業として、北欧やロシアの農民がつくっていた野趣あふれる作品に倣い、洋画家・山本鼎の提唱によって1919年に長野県上田市で誕生したもの。「山本鼎さんが海外から持ち帰った菓子入れを叔父が目にしてつくり始めたのだと思います」と春原さん。材料は、信州の山に多く生える白樺だ。伐採後1年間寝かせて乾燥させた木材から、長年の相棒である木地師がろくろ挽きでベースを削り出す。春原さんはそこに模様を彫り、色を塗って完成させる。

「叔父が仕事をしているのを間近で見てきましたから、中学生くらいの時からろくろを挽いて手伝っていました。その後、東京で美術の仕事をするようになりましたが、須坂に戻り、鳩の砂糖壺を受け継ぎました。叔父のものとは少し違いますが、私の砂糖壺は“絵を描くことが好きな人間がつくったもの”かもしれませんね」

彫刻刀やノミで加工し、木地に色をのせる。ずっと持ち続けてきたものづくりが好きだという純粋な心で仕事と向き合う日々。「名もなき職人がただひたすら制作しているだけ」と語る春原さんのスピリットは叔父から引き継がれたものだろう。



絵描きだった春原さんは、今も毎日、日記のように絵を描いている。



左から、ベースとなる木地→羽模様が彫刻されたもの→色をついたもの→模様を入れて仕上げた完成形。



砂糖壺の着色が終わり、乾燥させているところ。カラーバリエーションは、赤・白・青・黄・茶（生漆）の5種類。顔料とカゼインを乳鉢で練って色をつくる。最後に熱に強い塗料で仕上げる。



食卓にあるだけで和む愛らしい佇まい。

マトリョーシカのような入れ子などほかにも愛らしい器が。

取材協力／すの・くらふと

毎日使いたい 木工・編組品

木材加工や竹などの植物を編む手しごとの品は
素材のぬくもりもさることながら、木目や節、
ちょっとした不揃いさがひとつひとつの個性を醸す。



木杓子

奥井木工舎／岐阜県高山市

中央が素地、左は漆でコーティングした木杓子。右はしゃもじ。

試行錯誤し、たどり着いた 使いやすい伝統の木杓子

飛騨高山に伝わる生活道具のひとつ「有道杓子」。奥井木工舎の奥井京介さんは、約18年前にこの木杓子と出会い、口伝されてきたつくり方をあらためて調べ直すなど、伝統的な形状を模索し、実用性を備えたものとして現代に蘇らせた。材料はホオノキでつなぎ目がなく丈夫で軽い。すくいの部分の波打つような削り跡が美しく、やさしく食べ物をキャッチしてくれる。



(左)「夏場の木はくすんで使えないで、必然的に冬場の仕事になります」と奥井さん。(右)ナタのほかに出刃包丁も駆使して木を切り、削り出していく。

取材協力／奥井木工舎

<https://mainichi-kotsukotsu.jimdo.com/>

南木曽ろくろ細工の器

カネキン小椋製盆所／長野県木曽郡南木曽町



人気の「ちらし寿司の器」。さまざまな料理に合い、使い勝手が良い。

木地師が削り出す 美しい木目の日用器

面積の9割以上を森林が占める南木曽町は木製品の製造が根付いている。ケヤキやトチなど、木目が美しい広葉樹を用いた「南木曽ろくろ細工」もそのひとつ。明治時代から続くカネキン小椋製盆所は、和食器はもちろん、現在は時代に合わせてパン皿やサラダボウルなども製造している。写真の「ちらし寿司の器」は代表・小椋浩喜さんが考案。耐久性に優れ、洗いややすく手入れもしやすい。



(左)木を挽いている様子。ろくろにかけカンナで削る。
(右)ケヤキ漆の「ダイヤ型のカップ」。持ちやすく口当たりも良い。

取材協力／カネキン小椋製盆所

<https://www.kanekin-ogura.jp/>

使い込むほどに艶を帯びていく経年変化も楽しみたい。



戸隠竹細工のかご

原山竹細工店／長野県長野市

多様に使える、 丈夫で美しい竹細工

始まりは江戸時代初期からといふ「戸隠竹細工」。戸隠に自生し滑らかで独特の光沢がある「根曲がり竹」を使うのが特徴だ。持ち手付きのめかごは、買い物などの外出に、またキッチンで食材入れにするなど多様な使い道がありそう。明治時代から続く原山竹細工店には多種多様な暮らしの道具がずらり。四代目の原山昭俊さんが、一から手しごとで仕上げたさまざまな表情の品々が並ぶ。



(左)つくる道具の部位によって、竹の種類や編み方を変える。
(右)目の詰まったかごやざるなど店内には竹細工製品がずらり。

取材協力／原山竹細工店

曲げ箒

— hashime／静岡県袋井市



持ち手がL字の箒は卓上や段差の掃除に使い勝手良し。
小林さんオリジナルの形。

袋井の風が育てた 植物を編む

箒の材料はイネ科の植物である“ほうきもろこし”。袋井の山から吹き下ろす冷たい風が穂先の縮れを生み、美しく使いやすい箒となる。材料の栽培から箒づくりまでのすべてを一人でおこなう小林研哉さん。「手の大きさや握り方は使う人それぞれ。同じサイズでもいろいろな角度の持ち手をつくっています」。植物の細かな穂先が美しく整えられた力強い姿には、長く使いたくなる魅力が宿っている。



(左)つる細工や箒の職人だった祖父から教えたて、この仕事を選んだ小林さん。
(右)箒は穂先が曲がらないように、吊り下げて置いておく。

取材協力／—hashime

<https://hashime.base.shop/>

https://www.instagram.com/_hashime/

中部の手しごと・民芸 ～つくる人～

ガラス作家 安土草多さん



ワイングラス、コップ、小鉢、片口の器、花器、照明…。安土さんがつくるガラス作品は、どれも独特的な揺らぎのある模様と空気感があり、手に取ればしっくりと馴染む。ベーシックなフォルムで、使い手をホッとさせる安心感があるのだ。

「成形していく過程でカットする部分が出てきます。それを再利用すると不純物が混じるのですが、僕はあえて使い、ほかのガラスと混ぜてもう一度形にします。不純物が混じった風合いが好きなんです」

安土さんは作家としての評価を得られなかった時代があった。その時、“美術は権力者や宗教によって評価されてきたが、大衆がつくったものも美しい”と書かれた『美の法門』(柳宗悦)を読み、美の概念を拡張した「民藝」の考えに心が救われたという。「民藝の思想を理解して、自分の美意識でものをつくり、使い手はその美意識を受けて使っていく、それが現代の“民芸道”かもしれませんね」と笑う。



左から、ワイングラス、ロックグラス、コーヒーポット、どれも独特の揺らぎが特徴。



安土さんの代名詞になっているランプシェード。

安土草多

岐阜県高山市生まれ。名古屋大学在学中にフローリストに出会いそのまま花の世界へ。後に地元に戻りガラス作家である父の下で学ぶ。2002年に高山市内で築窯。独特のあたたくやわらかい雰囲気を持つガラス作品で知られる。飛騨民芸協会理事。<https://s-auchi.com>

「交流 Style」ホームページでは、
安土草多さんのインタビューを公開中。



美意識をのせて

揺らぎと風合いに

文化を守る
「ヒンメリ」の
ライ麦を自ら栽培し



クラフト作家 上原かなえさん

長野県・軽井沢町の隣にある小さな高原のまち、御代田でクラフト作家として活動する上原かなえさん。東京でデザイナーとして活躍後、北欧の手工芸を学びにデンマークへ。現地の人たちの価値観、丁寧な暮らしぶりに感銘を受け、その後旅行先のフィンランドで伝統装飾「ヒンメリ」に出会う。

ヒンメリは、藁に糸を通してつくる多面体のモビール。「シンプルで普遍的な美しさがある。その魅力の虜になりました」と上原さん。ヒンメリの第一人者、

エイヤ・コスキさんの工房を訪ね技を教わった。7年ほど前に御代田町へ移住。自身でライ麦を栽培してヒンメリを制作する。福祉施設「やまゆり共同作業所」の皆さんとライ麦ストローをつくるなど、活動の幅を広げている。

「北欧でもヒンメリのような手しごとは徐々に失われつつあります。だからこそ自らライ麦を育て、この文化を残していきたい。小さいながらも地域に良い循環を生み出していくべきだと思います」



「ヒンメリは、身近な天然素材をそのまま使う普遍的な強さがあります」と上原さん。

撮影協力／ザ・コンランショップ 代官山店



ヒンメリの基本形は8つの正三角形を組み合わせたダイヤモンド。



上原かなえ

北欧に伝わる手工芸などを研究するクラフト作家。長野県・御代田町を拠点に作品づくりをおこなう。2020年から「MIYOTAライ麦ストロープロジェクト」を主宰。近著に『上原かなえのベーバークラフト』(アティック社)など。
https://www.instagram.com/miyota_ryestraw/
<https://rye-straw.com/>

「交流 Style」ホームページでは、
上原かなえさんのロングインタビューを公開中。



飛騨さしこの テーブルウェア

本舗 飛騨さしこ／岐阜県高山市



ひと刺しごとに思い込もる 用の中から生まれた美

「刺し子」は、寒さの厳しい地域で、布の補強や保温性を高めるために、暮らしの中から生み出された技法。岐阜県飛騨地方にもその風習があったが、時代の変遷とともに衰退していった。しかし、昭和40年代にその魅力を再発見し世に伝えたいと刺し子作品をつくり始めたのが「本舗 飛騨さしこ」創業者の二ツ谷礼子さんだ。衣類だけではなく日用品にも刺し子を施し、「飛騨さしこ」の名で全国へ発信。そうして「岐阜県郷土工芸品」に認定されるまでになった。

丈夫な刺し子のアイテムは、使い、洗うことで風合いが増す。テーブルランナーやコースターなど、毎日の食卓で使われてこそ輝く。また一方で、「麻の葉」「七宝」など素朴で美しい模様に心が和む。

近年では、自分で縫える刺し子キットを求める外国人観光客が増えているのだとか。国を問わず、誰もが素朴で実用的な美に惹かれるのかもしれない。

同じ模様でも縫う人によって表情が変わるもの
刺し子の魅力。



刺し子の風呂敷や小物入れなど、
往時に使われていた日用品。



自ら縫いたいという人向けに
刺し子用の糸も販売。

取材協力／本舗 飛騨さしこ
<https://hida-sashiko.jp/>

山内染色工房の 型染めのマルチクロス

山内染色工房／静岡県浜松市



型を使って糊置きした布を工房の庭先で乾燥させている風景。

民藝の心と モダニズムの視点と

染色には、布を洗うための豊富な水源と乾かすための強い風が不可欠。静岡県浜松市は天竜川の豊かな水と遠州のからっ風と呼ばれる山風がよく知られており、染色には恵まれた環境だ。

染物屋の息子として生まれた山内武志さんは、染色家で人間国宝の芹沢鈴介に導かれ、染色を生業としてきた。ダイナミックに配置されるパターンは、“自由闊達”という言葉がよく似合う。昔から伝わる文様がベースでもモダンな仕上がりなのは、そこに自由を感じるからだろうか。幾何学模様をはじめとしたオリジナルの文様をあらゆる布に染め映している。

「テーマがあり、そこに自分のアイデアを重ねて創り出す姿勢でのづくりをしています。ただただ、先人から受けた想いを染め継いでいるだけです」

山内さんのパターンを存分に愉しめる作品のひとつが、マルチクロス。壁に飾ったり、テーブルランナーやソファカバーにしたり、名前の通り用途は多彩だ。自然のモチーフを取り入れた大らかなデザインは、使い手の暮らしにするより溶けこみ、生き生きとした表情を見せてくれる。



浜松市内の工房にて、
ハツラツと染色を語る
山内さん。



たくさんの布を染め続けて
きた山内さんの職人らしい手。



取材協力／山内染色工房
<https://www.ateliernuiya.com/>
(アトリエぬいやWEBサイト)

「交流 Style」ホームページでは、
山内武志さんのインタビューを公開中。



思わず笑みがこぼれる 郷土玩具

地域色を色濃く見せてくれる郷土玩具の数々。
中部地域にも、古くから伝わるたくさんの玩具があります。
素朴な風合いや、どこかとぼけた表情が愛らしい
中部の郷土玩具をご紹介。



酒買い達磨 (浜松張子)

静岡県浜松市



多度の彈き猿

三重県桑名市

厄除け祈願!
神社の門前土産

江戸時代中期から多度大社門前町で売られている土産品。厄をはじき去るという語呂合わせから縁起物として親しまれてきた。棒を抱かせた「くくり猿」を竹の反発を利用し弾いて上下させ遊ぶ。

取材協力／神社前 宮川屋

画像提供：桑名市観光協会



ぼってりとしたフォルムがかわいい犬張子。

酒買い達磨 (浜松張子)

静岡県浜松市



木型に美濃和紙を貼り、胡粉で溶いた膠で表面を白く塗って彩色するのが大まかな制作の流れ。

愛嬌いっぱいの表情に 笑みがこぼれる

1868年、旧徳川幕臣・三和永保が江戸から浜松に移り住み、江戸風の張子をつくり、酉の市で売り出したのが始まりとされる浜松張子。現在は五代目の鈴木伸江さんが一人で手がけるため生産数が限られている。素朴で愛らしい姿に多くの人が魅了されている。中でも「酒買い達磨」は、かわいらしさとモチーフの滑稽さで人気だ。

取材協力／浜松張子工房

きらら鈴

愛知県西尾市



画像提供：中村亜弓 (@nakamura_ayumi)

慰霊のためにつくられたきらめく土鈴

奈良時代から、西尾市のハツ面山では雲母が産出していた。明治時代にその発掘人夫が生き埋めになる事故があり、慰霊のためにきららとした雲母を散りばめた土鈴がつくられたのがこの玩具の始まりだ。

取材協力／松田民芸品



寅童子

愛知県新城市

画像提供：竹内時計店

徳川家康にちなんだ 寅の起き上がり小法師

徳川家康が鳳来寺の十二神将の一人「寅童子」の生まれ変わりだという逸話をもとに作られた寅の起き上がり小法師。七転び八起きの縁起物としても親しまれている。

取材協力／竹内時計店
<https://toradouji.theshop.jp/>

鳩車

長野県・野沢温泉村



見て、触れて
ほっこりする籐編みの玩具

信州は野沢温泉の郷土玩具として、観光客などにも親しまれてきた鳩車。籐を編んでつくられており、経年の変化も愉しめる。現在は生産がおこなわれておらず販売されていない。

飛驒の雪入道

岐阜県高山市



地域に伝わる 妖怪話を形に

奥井木工舎の奥井京介さんが木杓子(P.08)をつくる際に出る端材から何かできないかと考案して生まれた現代の郷土玩具。柳田國男の文献にある飛驒地方に伝わる「雪入道」の記述から着想を得た。独特なおかしみのある表情や素朴さ、玄関や部屋のアクセントにも良いと人気を博し、東京のセレクトショップなどでも販売されている。



個性ある佇まいは部屋の
アクセントにピッタリ。



形を整えて口の部分を切り出す。
下地を塗ってアクリル絵の具で
着色する。

取材協力／奥井木工舎
→P.08

中部の手しごと・民芸 ~つかう人~

付き合える友
民芸は
気兼ねなく



岐阜県高山市を中心街から車を走らせて約30分。小高い山の麓に、あたたかい光が木枠の窓から外に漏れている古民家が見えてきた。大きな看板こそないが、「やわい屋」を探している人には、ひと目でそれが目指す場所だとわかる。南に向いた間口が広く、太陽の光を少しでも多く取り入れるべくつくられた飛騨の民家だ。

築150年の古民家を移築再生し、「やわい屋」を営むのは、朝倉圭一・佳子さん夫妻。さまざまな職業を経て、家族の時間を大切にしながら生活できる小売業を漠然と考えていた時、朝倉さんは「民芸」の思想に強く惹かれた。もともと郷土史に興味があつて本をよく読んでいたこともあり、高山のまちの

つくり手がいて、使う人がいてこそ、手しごとは輝く。
素敵なものを手にした嬉しさ、使うほどに湧く愛着。
「民芸」に造詣が深い「やわい屋」店主の朝倉圭一さんに、
民芸品を暮らしに取り入れるコツをお聞きした。

やわい屋 店主 朝倉圭一さん



味わい深い壺やガラスの器、調味料などがひと目でわかるキッチン棚。



「カップは揃いではなく、自由な組み合わせでもしっくりくるんです」（朝倉さん）



朝倉さんの自宅のキッチンには、普段使いとして民芸の器が所狭しと並んでいる。



瀬戸本業窯（愛知県）のタイルがキッチンの調理台に使われている。



朝倉圭一

岐阜県高山市生まれ。民芸の器と私設図書館「やわい屋」の店主。築150年の古民家に妻と息子の3人で暮らしながら、器を売り、本を読む毎日を送る。著書に「わからないままの民芸」（作品社）。Podcast「ちぐはぐ学入門」を不定期で配信中。飛騨民芸協会理事、愛知県立芸術大学非常勤講師。
https://www.instagram.com/yawaiya_asakura/



やわい屋

JR飛騨国府駅から約5kmのところにある山里の一軒家で、朝倉さん夫妻の審美眼で選ばれた器を中心に、生活にまつわる品を扱うショップとギャラリー。屋根裏の私設図書館には、人文系を中心とした書籍が並び、一般向けに貸し出し（年会費制）をしている。「やわい」とは、飛騨地方の言葉で「支度をする」ことで、日々は楽しく生きるために「やわい」の連続であるという意味をこめている。

岐阜県高山市国府町宇津江1372-2
TEL / 0577-77-9574
<https://yawaiya.amebaownd.com/>

答えてくれた。器を買うのなら、揃いではなく1枚ずつ違う皿でもいい。また無理に民芸品ばかりにする必要もないという。

「パスタを盛る洋風のお皿に、民芸の湯呑みがしつくりくることだってあるのですから」

加えて、民芸品はシンプルなものによく合うことも教えてくれた。北欧のデザイン、プリミティブなもの、フォークロアな家具やファッショント相性が良いそう。

さらに、「日本を旅するのにガイドになるのが民芸だと思います。その土地の風土から生まれたものを知ることで、その土地を理解することができます」と朝倉さん。そんな視点で地域の手しごとや民芸に触れてみるのも良いかもしれない。

「交流Style」ホームページでは、朝倉圭一さんと「民芸」との出会いや「やわい屋」を開くまでのストーリーを公開中。



文筆家・甲斐みのりと行く

中部 手しごと めぐり

「交流 Style」で、
文筆家の甲斐みのりさんが訪れた
中部地域の手しごと・工芸の工房をご紹介。



甲斐さんの思い出

陶芸に七宝焼と、愛知県では焼き物を楽しませていただきました。
常滑は、招き猫のオブジェが散見され、まち 자체が魅力的。
このとき手に入れた器のおかげで食事がより楽しくなりました。



【常滑焼】

マルヨ久田製陶所（常滑市）

先代からの技術を継承しつつ
現代風に進化も

平安時代末期より多くの窯窓
が築かれ、当時からさまざまな
焼き物がつくられていた常滑。
現在は先人の技法を進化させ、
新たな挑戦を試みる窯元
が多数。中でも常滑焼における
食器の第一人者、久田貴久さんが
三代目代表を務める「マルヨ久田製陶所」は、
料理人と常滑焼とをつなぐ試みにも尽力している。

マルヨ久田製陶所

常滑市瀬木町3-207 TEL / 0569-35-2987



手しごと・工芸・民芸を通して
地域の豊かさを感じる

中部地域のさまざまな手しごとや工芸の現場
で、ものづくりを体験させていただきました。
今でも手先や腕に感覚が残っていて、当時の
ことが蘇ります。そして、実際の品を
手に取ってみると、人の手でつくられている
ぬくもりを実感できる。私も中部地域で生
まれ育ちましたが、こうした現場を通して地域
の豊かさを感じることができました。

甲斐みのり

静岡県富士宮市生まれ。旅や散歩、手土産、
クラシック建築、暮らしと雑貨などを主な題材に、
書籍や雑誌に執筆。新刊に『旅のたのしみ』
(ミルブックス)、「『すきノート』のつくりかた」
(PHPエディターズ・グループ)がある。
<http://www.loule.net/>

【尾張七宝】

田村七宝工芸（あま市）



岐阜
Gifu

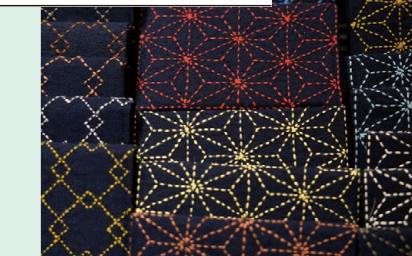
Cifu

甲斐さんの思い出

この企画で最初に訪れたのが飛驒さしこだったので印象に残っています。
また普段何気なく使っているものがこんなに手間をかけて
つくられているんだと感じたもののひとつが和紙でした。

【飛驒さしこ】

本舗 飛驒さしこ（高山市）
→ 詳細はP.12



【水うちわ】

家田紙工株式会社（岐阜市）



職人技が光る水のように透明なうちわ

現在、岐阜市内で水うちわをつくる工房は2軒のみ。竹の骨組みに雁皮紙という透けるほど薄い和紙を貼り、ニスを塗って仕上げるのだが、1本完成させるのに1週間以上かかるという。「家田紙工」では、独自に調合したニスを使い、より美しくて強靭な水うちわをつくる工房として名を馳せている。

家田紙工株式会社

岐阜市今町3-6 TEL / 058-262-0520 <https://www.iedashikou.com/>

世界からも注目される
瀬戸焼の伝統技法

【練り込み陶芸】

水野智路（瀬戸市）

1000年以上の歴史を持ち、「せともの」として親しまれる瀬戸焼。その瀬戸焼の中でも、多彩な色土を使って模様をつくる「練り込み陶芸」の技法がある。水野智路さんはその技術を駆使して星やパンダなど、ポップな柄の陶器を制作。水野さんは練り込み陶芸の魅力をSNSで発信すると、瞬く間に世界から注目を集めるようにな。

水野智路

<https://www.instagram.com/tomoro.m/>



【美濃手すき和紙】

石原英和工房（美濃市）



1300年の歴史を誇る
日本最古の和紙

良質な原料と長良川や板取川の清流に恵まれた岐阜県美濃市で1300年以上前からつくられている美濃和紙は、日本最古の紙とされる。石原英和さんは15歳で父親に師事し、およそ75年美濃和紙を漉き続けている職人の一人。典具帖紙、伊勢型紙など需要に合わせさまざまな紙をつくっている。

石原英和工房

美濃市上野416 TEL / 0575-37-2940





三重

Mie

甲斐さんの思い出
組紐の制作体験は本当に難しくて…
美しく丈夫な組紐をつくるのに、どれだけ大変な工程を経ているんだと思いました。
また伊勢型紙も木綿も、和にとらわれないモダンなものなどと再発見しました。

美濃和紙と彫刻技術が生み出す 独特の風合い

【伊勢型紙】

オコシ型紙商店（鈴鹿市）



着物の生地に柄や文様を染めるのに用いる「伊勢型紙」。3層に貼り合わせ、燻煙や乾燥を施した美濃和紙に、彫刻刀で図柄を彫る。大正時代から伊勢型紙の製造・販売を行う「オコシ型紙商店」では、着物以外のファッショングインテリアにも取り入れられる型紙を製造し、伝統を現代に継承している。

オコシ型紙商店

鈴鹿市江島本町27-25 TEL / 059-386-0229
<https://okoshi-katagami.com/>

【伊賀組紐】

くみひも studio 荒木（松島組紐店）（伊賀市）



美しい光沢を放つ 伊賀の伝統工芸品

絹糸や金銀糸などを使い、角台、丸台、高台、綾竹台などの伝統的な組台で織細な紐に組み上げる「伊賀組紐」。美しい絹糸が織りなす独特の風合いが特徴だ。「くみひも studio 荒木（松島組紐店）」では、組紐小物や帯締めを販売。5~10名程のグループは予約制で組紐の制作体験が可能だ。

くみひも studio 荒木（松島組紐店）

伊賀市荒木160 TEL / 0595-21-1137（松島組紐店）
<http://www.iga-kumihimo.com/>



静岡
Shizuoka

甲斐さんの思い出

駿河和染は、この物質とこの物質が反応してこの色が出る！といった感じで、科学の世界なんだと衝撃を受けました。葛布はベテランの職人さんがおおらかで、その人柄が印象的でした。

【掛川手織葛布】

小崎葛布工芸株式会社（掛川市）

江戸時代からの 伝統的な掛川土産

その昔、掛川の山中の滝で修業をしていた行者が水にさらされると白く美しい風合いになる葛の蔓を見つけ、その素材から繊維を紡ぎ生地を織る方法を土地に伝えたのが始まりといいう「掛川手織葛布」。現在は2軒のみ残る織元のひとつ「小崎葛布工芸」は江戸時代から続く老舗。掛川手織葛布を使った小物類を購入できる。

小崎葛布工芸株式会社

掛川市城下3-4 TEL / 0537-24-2222
<https://ozaki-kuzufu.jp/>



【伊勢木綿】

臼井織布株式会社（津市）

江戸時代から愛されてきた希少な木綿

通気性や保温性に優れ、洗濯してもシワになりにくいと江戸の粋人たちに好まれたといいう「伊勢木綿」。現在製造しているのは「臼井織布」1軒のみで、伝統的な製法はそのままに、現代の暮らしに活かされるさまざまな製品を生み出している。バッグやハンカチなど、土産にも最適な商品も販売。



臼井織布株式会社
津市一身田大古曾67
TEL / 059-232-2022
<https://isemomen.com/>



【伊勢型紙】

オコシ型紙商店（鈴鹿市）

織細さとぬくもりが にじみ出る和染

静岡市は、江戸時代より染色が盛ん。大正時代には地元職人の染色技術が高く評価され、「駿河和染」として発展。絵柄は主に型紙や円錐形の筒を使う糊防染が一般的だが、「紺友染色工房」は溶かしたロウで模様を描く「ろうけつ染め」をおこなう。ロウの温度や厚さなどで風合いが変わり、趣深い表情をみせる。

紺友染色工房

静岡市葵区追手町7-14 TEL / 054-252-5095
<http://www2.tokai.or.jp/kontomo/>

【駿河和染】

紺友染色工房（静岡市）



長野
Nagano

甲斐さんの思い出
お店や家でも使われて、まちに根付いているという意味で松本民芸家具はまさにそうでした。

戸隠竹細工のコーヒードリッパー、南木曽ろくろ細工のパン皿は、私の生活にも欠かせない品になっています。

【松本民芸家具】

松本民芸家具（中央民芸ショールーム）（松本市）



重厚感漂う家具は世代を超えて愛される

硬くて粘り強いミズメザクラを主に使い、ラッカーや拭漆などの塗装で仕上げる「松本民芸家具」。深い艶と重厚感があり、年月が経つごとに味わいを増す。中央民芸ショールームでは、職人が仕上げた商品を展示販売。使うほどに磨きかかる家具は、ホテルや飲食店のみでなく、一般家庭でも親から子へ受け継がれている。



松本民芸家具
(中央民芸ショールーム)
松本市中央3-2-12
TEL / 0263-33-5760
<http://matsumin.com/>

【戸隠竹細工】

原山竹細工店（長野市）

→詳細はP.9



【南木曽ろくろ細工】

カネキン小棕製盆所（南木曽町）

→詳細はP.8



中部地域の民芸ゆかりのスポット

手しごとや民芸に興味を持ったら、まずは中部地域の民芸関連施設へ。「使う」ことに加えて「知る」ことで、もっと身近に感じ、地域への理解も深まるはず。



愛知県豊田市 豊田市民芸館

愛知県唯一の公立の民芸館。さまざまな民芸品を展示するほか、日本民芸館から移築した大広間や柳宗悦の書斎も。定期的に開催する企画展にも力を注ぐ。近隣にある「豊田市本多記念民芸の森」とともに訪れたい。

豊田市平戸橋町波岩86-100
TEL / 0565-45-4039
<https://www.mingeikan.toyota.aichi.jp/>

愛知県瀬戸市

瀬戸民藝館

瀬戸・洞地区、ならびに瀬戸市で江戸時代中期以降につくられてきた日常の中で使う器を、ものづくりの視点から紹介。この地のものづくり文化を紹介するほか、工芸ショップでは、瀬戸本業窯の器やガラス、染織、わら細工など暮らしの道具を購入できる。

瀬戸市東洞町17
TEL / 0561-21-3773
<https://www.setomingeikan-museum.jp/>



岐阜県高山市 日下部民藝館

幕府の御用商人として栄えた商家の邸宅を復元。国の重要文化財にも登録され、一般開放されている。大きな梁や当時300両（現在の3000万円）の価値があったとされる仏壇など、見どころが満載だ。

高山市大新町1-52
TEL / 0577-32-0072
<http://www.kusakabe-mingeikan.com/>



静岡県静岡市 静岡市立芹沢鉢介美術館

「型絵染」で人間国宝になった静岡市生まれの染色家・芹沢鉢介の作品や収集品を展示。現在収蔵されている芹沢の作品約1300点とコレクション約4500点は、年に4回展示替えがおこなわれ順次公開している。

静岡市駿河区登呂5-10-5
TEL / 054-282-5522
<https://www.seribi.jp/>



長野県松本市 松本民藝館

「なまこ壁の蔵造り」の建物が印象的な民芸館。水甕や壺、漆器、錢箱、家具、郷土玩具といった多彩な民芸品のほか、朝鮮白磁・青磁など、世界各地の陶磁器・木工品・染織品・ガラス器なども展示している。

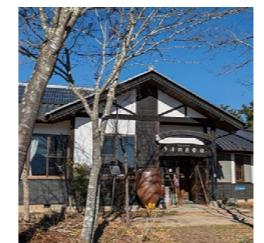
松本市里山辺1313-1
TEL / 0263-33-1569
<https://matsu-haku.com/mingei/>



長野県佐久市 多津衛民藝館

「平和と手仕事の大切さ」を理念に創設された民芸館。創設者で初代館長の小林多津衛が教職のかたわら80余年にわたって蒐集した陶磁器をはじめ、その後集められたコレクションの数々を展示している。

佐久市望月2030-4
TEL / 0267-53-0234
<https:// tatsue-mingeikan.jimdofree.com/>



交流 Style Information

「交流 Style」公式インスタグラム @koryu_chuden



手軽に情報をキャッチ！

ホームページと連動し、記事の内容をギュッと凝縮してお届けしています。暮らしに役立つ情報や中部地域の魅力が満載。



プレゼント情報をcheck！

随時、取材にまつわる品物のプレゼント企画をおこなっています。



「交流 Style」のSNS

「交流 Style」公式インスタグラムと、「中部和菓子図鑑」公式インスタグラムより情報発信中！ 素敵な写真とともに記事の更新のお知らせや取材時の様子などをお届けしています。

色鮮やかな
和菓子に注目！

中部和菓子図鑑



「中部和菓子図鑑」公式インスタグラム @chubu_wagashi_zukan



中部地域注目の和菓子を
ご紹介！

「交流 Style」の人気コーナー「中部和菓子図鑑」の特設アカウント。季節や用途にあわせた、さまざまな和菓子を集めました。

